声門下腔に局限した悪性リンパ腫の一例

保 谷 則 之・塩 谷 彰 浩・徳 丸 裕・行 木 英 生

A Case of B-cell Malignant Lymphoma of the Subglottic Region and Trachea

Noriyuki Houya, Akihiro Shiotani, Yutaka Tokumaru and Hideo Nameki

A 57-year-old housewife complaining of choking was admitted to our hospital. Fiberscopic examination revealed a white tumor with a smooth surface and a slight hypervascularity below the vocal cords. A cervical X-ray examination taken from the lateral view revealed that the tumor was located between the area just beneath the vocal cords and the fourth ring of the trachea. Emergent tracheostomy and biopsy of the tumor were performed. Histological diagnosis indicated that the tumor was a small, lymphocytic type B-cell malignant lymphoma (diffuse). No other lesions were detected in the systemic evaluation. After three courses of combined chemotherapy (CHOP), the tumor disappeared. The clinical and pathological characteristics of this case were similar to those of malignant lymphoma of mucosa-associated lymphoid tissue (MALT) which arises in the stomach, salivary glands, lungs, and thyroid.

Key words: 悪性リンパ腫, 気管内腫瘍, 緊急気管切開, Mucosa-associated lymphoid tissue (MALT)

はじめに

喉頭の悪性リンパ腫は希であるが、その中でも声門下に局限した症例はさらに希である。今回我々は、著しい呼吸困難を呈して緊急気管切開を行った、声門下腔から頸部気管上部に局限する悪性リンパ腫の1症例を経験したので報告する。

症 例

患者: 57歳主婦。

主訴: 労作時の呼吸困難。

既往歴・家族歴: 特記すべきことなし。

体格: 小柄, 肥満あり。

現病歴: 1993年初めより遷延する咳嗽, 盗汗を認めていたが放置していた。同年9月に労作時の呼吸困難を自覚したため当院呼吸器科を受診した。9月10日気管支ファイバースコープにて声門下腔から頸部気管にかけて後壁から前方へ膨隆する腫瘍を認めた。気道狭窄が著しいため当科依頼となった。患者は喘鳴と体動時の著しい呼吸苦を訴えていたが嗄声は認めなかった。頸部リンパ節腫張, ワルダイエル輪の腫張は認めなかった。

画像所見: 頸部側面高圧X線像(図1)では、腫瘍は声門直下から第4気管輪にかけて後方から前方へ突出している。頸部造影CT軸位断像(図2)では気道の最狭部は声

図1 頸部側面高圧X線像
声門直下に後方から前方へ突出する腫瘍陰影を認める。

門から15mm 尾側の気管で、 5×8 mm であり、内腔の約75%が狭窄していた。窒息の恐れがあったため、直ちに坐位にて局麻下気管切開を施行した。第4気管輪下に逆U字切開を行ったところ、気切孔を通して気管後壁から膨隆する白色の軟らかい腫瘤の下端が観察され、生検を施行した。肉眼的に気管外側壁に腫瘍の浸潤を認めなかった。病理永久標本にて悪性リンパ腫が疑われた。

ラリンゴマイクロ所見：病理診断を確定するためと声門下腔の腫瘍の占拠範囲を同定するために、9月22日気管孔より挿管し全身麻酔下に顕微鏡下喉頭鏡検査を施行し再び生検を実施した。腫瘍は声帯と接することなく声門下腔後壁から膨隆し、表面に血管増生のある軟らかい腫瘤であった(図3)。

病理組織診断：悪性リンパ腫，B-cell，diffuse，small，lymphocytic type で病理組織学的に粘膜由来の悪性リンパ腫である MALT (mucosa associated lymphoid tissue) derived lymphoma の特徴と類似した，粘膜下に結節性病巣を形成する lymphoid tissue と毛細血管の介在

図2 頸部造影 CT 軸位断像
気道の最狭部は声門から15mm 尾側の気管で、 5×8 mm であり、内腔の約75%が狭窄していた。

図3 顕微鏡下喉頭所見
白色の軟らかい腫瘤が声帯と接することなく声門下腔後壁から膨隆し、表面に血管増生を認めた。

を伴う異型リンパ球の増殖を認める¹⁾(図4, 5, 6)。

病期診断：血液生化学，Ga 全身シンチグラム，胸・腹部 CT，エコーにおいて異常所見を認めないため Stage IE と診断された。

治療方針：本症例は組織型から WHO, working formulation における軽度悪性群に分類され，病期も I 期であるが，微小散布巣の早期の治療と照射野の縮小及び線量の節約が可能となる点から化学療法先行の放射線併用とした。

経過：CHOP 第2クール施行後に行った逆行性気管-喉頭ファイバースコープ所見では，腫瘍の著明な縮小を認めたが7時から9時の方向に一部残存を認める。第3クール施行後12月7日に行った同様の検査では，腫瘍の消失を認めている(図7)。

12月13日よりリナック照射22Gy を施行した時点で患者の希望で治療を中断し，退院す。現在，照射後8カ月経過して再発を認めない。

図4 生検標本の病理組織像 (H & E $\times 10$)
粘膜下に結節性病巣を形成する lymphoid tissue を認める。

図5 図4の強拡大 (H & E $\times 40$)
毛細血管の介在を伴う核の角ばった異型リンパ球を認める。

図6 生検標本の免疫組織染色像
抗 B-cell 抗体 (L-26) 陽性である。

図7 逆行性気管－喉頭ファイバースコープ所見
CHOP 第2クール施行後(左)では、腫瘍の著明縮小を認めたが、7時から9時の方向に一部残存を認める。
第3クール施行後(右)では、腫瘍は消失している。

考 察

喉頭の悪性リンパ腫は全喉頭悪性腫瘍の1%以下とされ、そのうちリンパ流の豊富な声門上のものが8割近くを占め²⁾、声門下に原発するものはきわめて希である。また、声門上及び声門に原発した症例では、腫瘍が声帯や仮声帯、披裂部に達すれば、嗄声や嚥下時の違和感が出現するため、これらを主訴として腫瘍が発見される。それに対し、声門下腔・気管に腫瘍を形成した場合は嗄声が初発症状とならず、腫瘍による気道狭窄は無症状に進行する。一般的に気管内腫瘍は、その内腔が約75%以上の狭窄が生じないと咳嗽、呼吸困難、喘鳴といった自覚症状が出現しないため³⁾、患者は高度の気道狭窄を生じて初めて外来を受診することになる。したがってこのような訴えの患者には、頸部側面高圧X線写真の撮影とファイバースコープによる声門－気管腔の観察が必須となる。また文献的には、喉頭のリンパ腫と診断された後、治療開始前に気道閉塞を来して死亡した例⁴⁾もあり、本症例のように直ちに気管切開を行った方が安全である。さらに、病変の評価には、気管孔から挿入した逆行性気管－喉頭ファイバースコープによれば、声門に遮られることなく腫瘍を観察することが可能である。

1984年、Isaacson^{5, 6)}らは、胃、唾液腺、甲状腺、肺に原発するB細胞型節外性悪性リンパ腫の一部をMALT (mucosa-associated lymphoid tissue) 由来の悪性リンパ腫という概念にまとめた。これらは臨床的には比較的長期間局所にとどまり、化学療法以外にも、放射線療法、外

科的切除といった局所療法への反応が良く、また、転移する場合も、別のMALTをもつ臓器に起こり、転移巣の治療効果も良く、総じて予後は良好であるとされている。さらに1989年、Morgan⁴⁾らは4例の喉頭に局限したB細胞型悪性リンパ腫を経験し、MALT由来の悪性リンパ腫との共通点が多いと指摘している。本邦においても1992年、小林⁷⁾らは自らの経験をもとに気管および声門下に原発する悪性リンパ腫がMALTの概念に含まれる可能性があるとして述べている。今回我々が経験した症例においても、腫瘍は声門下・気管内壁より発生し、病理組織学的にMALTの特徴と類似した、粘膜下に結節性病巣を形成する lymphoid tissue と、毛細血管の介在を伴う異型リンパ球を認めた。また臨床的にも治療に対し良好な反応をみせたことから、小林らと同様に、気管および声門下に原発する悪性リンパ腫はMALTの概念に含まれる可能性があると考えられた。

ま と め

声門下腔に局限した希な悪性リンパ腫の一例を経験したので、若干の文献的考察を加え報告した。胃、唾液腺、甲状腺、肺にみられる予後良好のB細胞型悪性リンパ腫 (MALT-derived lymphoma) との類似点が認められた。

本論文の要旨は第6回日本喉頭科学会 (1994年3月、佐賀市) において発表した。

参 考 文 献

- 1) Isaacson PG et al: Malignant lymphoma of mucosa-associated lymphoid tissue. *Histopathology* 11: 445~462, 1987.
- 2) ト部信行ほか: 喉頭に発生した悪性リンパ腫. *耳喉* 54(2): 119~123, 1982.
- 3) 田中春仁ほか: 閉塞性換気障害を呈したホジキン病. *日胸疾会誌* 30(9): 1732~1737, 1992.
- 4) Morgan K et al: Non-Hodgkin's lymphoma of the larynx (Stage 1E). *Cancer* 64: 1123~1127, 1989.
- 5) Isaacson PG et al: Malignant lymphoma of mucosa-associated lymphoid tissue. *Cancer* 52: 1410~1416, 1983.
- 6) Isaacson PG et al: Extranodal malignant lymphoma arising from mucosa-associated lymphoid tissue. *Cancer* 53: 2515~2524, 1984.
- 7) Kobayashi H et al: Primary malignant lymphoma of the trachea and subglottic region. *Internal Medicine* 31(5): 655~658, 1992.

別刷請求先 〒420 静岡市追手町8-2

静岡赤十字病院耳鼻咽喉科 保谷則之